

地域の人生をほりおこす 聞き書きプロジェクトについて



■背景

東条川用水は、この地域を支える大事な水ですが、それぞれが段階的に整備され、また日常生活の中で私たちの目にする施設が「昭和池」「鴨川ダム」などそれぞれが独立したものとして捉えられ、水利施設全体のネットワークを示す名称が明確に地域で認識される機会がありませんでした。

兵庫県では、みんなでこの東条川疏水について学び、地域の財産として生かし、地域の手で次世代につないでいきたいと考え、東条川疏水ネットワーク博物館構想について平成23年度に地域や有識者の方々と議論しコンセプト等をまとめ、平成24年度から地域と連携しながら地域の方の人生を聞き取る「聞き書きプロジェクト」を実施するにしました。

■聞き書きとは

聞き書きとは、語り手と聞き手が対話を重ねて、日常に埋もれてしまいそうな、語り手の生活や考え方、仕事のことなどを聞き出し、「話し言葉（聞き書き言葉）」で文章化していく共同作業です。一人の人生はディテール（全体の中の細部）にこそ面白みがあると考え、その時代に生きているひとりひとりの人生を「歴史」として記録していく取り組みです。



平成26年聞き書きより

■実施概要

○語り手

・東条川疏水受益地にお住まいまたは、東条川疏水や疏水施設に関して思い出をお持ちの方（地域の方と相談し、依頼）。

○聞き手

・兵庫教育大学等、兵庫県内の大学。地域の高校等との連携により実施

○プログラム・スケジュール（例）

- ・9月上旬：事務局による聞き書き試行（1日）
 - ・9～10月：聞き書きの研修（聞き書きおよび地域の概要および聞き書きの実践（1日））を実施
事務局にて、聞き書きマニュアルを作成
 - ・10～11月：事務局（県）による語り手と聞き手のマッチングを行う。
基本は、語り手1人に対し、聞き手2人とする。
聞き書きの実施（1日）およびレポート作成。
 - ・11月～：語り手への聞き書きレポート確認
- ※：成果発表の実施は地域のその他の動きと連動させる

- ・スケジュールについては、各関係者調整のもと決定
- ・参加にあたって、経費等はありません（移動が必要な場合、大学から現場へ事務局が送迎予定）

▽▽聞き手の動き

- ・研修実施のための事務局による事前研修（キックオフ研修）への参加（約1日）
- ・研修レポート作成、聞き書き計画作成、聞き書き（約1日）、聞き書き作成
- ・成果発表会への参加（半日） ※聞き書き計画、テープおこし等は各自実施

【参考】：東条川疏水について

●長らく水に苦労した東播磨地域

東播磨地域は日本でも特に雨の少ない地域で、丘陵地、台地、段丘などの地形から河川の水利用が難しかったために、日本有数のため池密集地帯として知られています。

かつて、この地域に暮す人々は自分たちの農業を支えるために井堰や池をつくるなど、水を得るための工夫や努力を積み重ねてきました。しかし、現在確認できる江戸時代以前の記録でも、水争いが絶えない地域であったことが伺えます。

●大切な水を地域に届ける「東条川疏水」

このように長らく水に苦労した東播磨地域において1928年(昭和3年)に昭和池築造が始まり、1949年(昭和24年)には戦後初めての国営事業として鴨川ダムが着工しました。鴨川ダムが完成した1951年(昭和26年)には、地域に水を届ける幹線水路の建設が始まりました。

●戦後復興の象徴「開拓地」へ水を届ける「東条川疏水」

また、戦後の「緊急開拓事業」による草加野万勝寺地区の開墾地や嬉野地区は台地上にあるために開発も厳しい状況でしたが、1958年(昭和33年)に400haにも及ぶ開拓地に鴨川ダムの水をポンプで汲み上げて送れるようになり生活が安定しました。

●高度な土木技術が凝縮する「東条川疏水」

東条川疏水には、昭和池や鴨川ダムはもちろん、建設当時の土木技術では不可能とされた「船木池」のアースダム、当時の土木技術の粋が集積された「安政池」、大きな谷を渡る1,087mもの曾根サイフォンや、水を公平に配分する六ヶ井円筒分水など、高度な土木技術が凝縮しています。そして、今日では播州米のほか、酒米の「山田錦」を産するなど、優良農業地域へと大きく変貌しました。

●全国の疏水百選の一つに選ばれた「東条川疏水」

広く国民の関心を集め、農地資源の価値を国民に伝えることにより、日本の美しく豊かな“水・土・里”を育てることを目的に平成18年2月3日国民投票により疏水百選が決定されました。この疏水百選は、①農業及び地域の振興②歴史・伝統・文化③環境・景観④地域コミュニティの形成を視点に、全国から“琵琶湖疏水”をはじめ110ヶ所が選定されました。東条川疏水は兵庫県から選ばれた3ヶ所の内の1つです。

●上水としても利用される「東条川疏水」

東条川疏水の受益地域の都市化の進展により、小野市、加東市(当時は社町、滝野町)の水需要が大幅に増大したため、農業用水合理化対策事業により昭和49年度から水利転用され、上水として供給されています。なお、水源として小野市は33%、加東市は27%を占めています。

●土井集落の移転から生まれた「東条川疏水」

鴨川ダムの築造により水没した土井集落は、黒谷本村の北方1,000mに位置し、7戸46人が居住し、水田7ha畑1haが耕作されていました。そして、補償により6戸が南に接する黒谷と秋津に移転しました。

●ため池とのネットワークを構築する「東条川疏水」

鴨川ダムから注水された水は安政池、船木池を経由して東条川に放流される外直接ため池に注水されています。これにより、水路を介して水のネットワークが構築され、これが生物を育み、人と人とのつながりを醸成する効果を生み出しています。

●県下随一の田園地帯、山田錦の主産地を支える「東条川疏水」

伊丹・灘地方は江戸時代に清酒が初めて醸造されて以来、灘五郷をはじめとする全国有数の清酒生産地を形成し、全国第1位の生産高を誇っています。東条川疏水の受益地は、伊丹・灘地方の蔵元へ山田錦をはじめとした酒米を提供する主要生産地となっています。それは、この地域が酒米の生産条件である最適の地形、気候、土壌に適しているためです。

聞き書きプロジェクトでは、東条川疏水の水利施設の建設当初の話、集落の成り立ち、集落での暮らし等、上記の項目を参考に語り手に体験談を話していただきます。

